

# 茨城大学学報

第345号

令和元年6月～令和元年7月



オープンキャンパス 今年も大盛況！

## INDEX

- ◆ 創立 70 周年を記念した創立期の写真展を開催
- ◆ 「第 3 回めぶきビジネスアワード」大学イノベーション賞受賞（水圏センター・増永英治助教）
- ◆ 教育学部附属中で教員の働き方改革に関する報告会
- ◆ 茨城県地域気候変動適応 C 開設記念シンポジウム 開催
- ◆ 農学部・フードイノベーション棟の竣工記念式を開催
- ◆ 県教育長招き「教師の魅力」語るイベント
- ◆ SDGs 達成に向けた地域・大学のアクションを考える講演会【茨城大・常磐大・茨城キリスト教大】
- ◆ オープンキャンパス開催
- ◆ 成績優秀学生を表彰 表彰者は授業料を一部免除

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

## ◆ 創立 70 周年を記念した創立期の写真展を開催

本学図書館では、創立 70 周年を記念した企画展「創立 70 周年記念 セピア色の思い出—茨城大学創立期の写真から—」を開催しました。

この企画展は、創立 70 周年記念式典が開催された 5 月 25 日を含む、5 月 17 日～6 月 2 日のべ 17 日間開催され、教職員、学生、卒業生や地域の方など多くの来場者で賑わいました。

会場では、本学図書館、水戸市立博物館、本学工学部の同窓会組織である多賀工業会が所蔵する写真の中から、前身の水戸高等学校や多賀高等工業学校時代の写真なども含む創立期の写真 26 点に加えて、大学設置認可申請書や開学式関係書類といった貴重な資料や、高い時計台がシンボルだった旧附属図書館本館を描いた絵画なども飾られ、在りし日の同大の風景に想いをはせる展示となりました。

また、創立 70 周年記念事業の一環で本学同窓会連合会と茨城新聞社の協力により制作しました「茨城大学ビジュアル年表」の特大パネルの展示も、来場者の目を引いていました。

あわせて展示室には、本学図書館職員のアイディアにより、大学図書館キャラクター「わらづと君」の等身大パネルとの記念撮影コーナーや、ひと昔前に図書館で使用されていた蔵書用の刻印機を用いて来場記念のしおりが作成できる刻印機体験コーナーも設けられ、それらを楽しむ家族連れなどの姿も多く見られました。

来場者からは「大学の歴史を感じられ、その一員であることに誇りを持たれた」「卒業生として見せていただきなつかしく思いました」等の感想が寄せられました。



創立期の懐かしい写真が壁一面に並ぶ正面は貴重資料の展示ケース。



「茨城大学ビジュアル年表」の特大パネル



オリジナルキャラクター「わらづと君」と写真に収まる図書館職員の面々

◆ 「第3回めぶきビジネスアワード」大学イノベーション賞受賞  
(水圏センター・増永英治助教)

6月21日、常陽銀行・足利銀行・めぶきファイナンシャルグループ主催の「第3回めぶきビジネスアワード」表彰式が開催され、広域水圏環境科学教育研究センターの増永英治助教が「大学発イノベーション賞」を受賞しました。

めぶきビジネスアワードは、新事業プランの実現・成長に向け、めぶきファイナンシャルグループがサポートすることにより、新産業・新市場の創出を促進することで地域経済の復興・活性化を図るものです。今回は571件の応募がありました。このうち大学発イノベーション賞は、大学または研究室、大学教授が起業・事業展開を目指す事業で、実現性が高いプランに対し表彰されます。

増永助教が提案したプランは、潮汐や黒潮などによって発生する海洋の複雑な流動構造を再現できる高精度の数値モデルを開発し、その計算データを学習値とする機械学習技術を用いたユーザーフレンドリー型海況予測システムを提供するというものです。あわせて、予測データの扱い方や活用法に関するコンサルティング事業も想定しています。

増永助教は、「今後、共同研究等を経てより具体的に事業化に向けた取り組みを進めたい」と話しています。



## ◆ 教育学部附属中で教員の働き方改革に関する報告会

6月27日、本学教育学部附属中学校で行われた公開授業研究会において、昨年度から取り組んでいる教員の働き方改革についての報告会が開かれました。

学校における働き方改革が求められる中、同校では昨年11月から厳格な労働時間の把握を行い、今年1月には本学内に「附属学校園における働き方改革推進タスクフォース」を設置して、附属学校・幼稚園の具体的な業務の見直し等に取り組んできました。

同校においては、各業務について、教育上の有用性なども鑑みて「やめる業務（やめたい業務）」「教員以外に担当を替える業務」「教員の負担を軽減する業務」に仕分けて徹底した見直しを図りました。それにより、夜間・休日の電話対応の留守番電話への切替（緊急の保護者対応はショートメッセージのみ使用可能なスマートフォンで対応）、会議の出席者を厳選して時間割内に組み込む、一部業務における学生・保護者によるボランティアの活用などの取り組みを進めた結果、昨年11月には約60時間だった教員の平均時間外・休日労働時間が、今年春には約半分の30時間前後で推移するようになるなど一定の効果が見られました。今年度については、家庭訪問の取り止め、宿泊共同学習の宿泊日数の削減、校内清掃の時間削減などに取り組みながら、丁寧に効果の検証と取り組みの見直しを進めていきます。

報告を行った影山敬久副校長は、「生徒や保護者の皆様からの理解を受けてここまで進めてこられた。本校教員からも『時間を意識して効率的に仕事を進めるようになった』『家で過ごす時間が増えた』などの声があがっている。一方で、教職員や社会の意識改革、そして何よりも教師の仕事の絶対量の削減といった難しさがまだまだある。引き続きさまざまな取り組み、検証により、働き方改革を進めていきたい」と述べました。



公開授業研究会内のランチョンセミナーとして  
実施された報告会の様子



取り組みを報告する影山副校長

## ◆ 茨城県地域気候変動適応C開設記念シンポジウム 開催

今年4月に茨城大学気候変動適応科学研究機関（ICAS）内に茨城県地域気候変動適応センターが開設されたことを受け、6月28日、設立記念シンポジウムが開催され、自治体関係者など107人が来場しました。

シンポジウムではまず、三村信男学長から気候変動適応に関する世界の潮流や日本での適応法施行までの経緯について基調講演がありました。

続いて、茨城県地域気候変動適応センターのセンター長を務める理工学研究科の横木裕宗教授が、同じセンターの組織体制、事業構想、茨城県の適応の現状を紹介しました。

後半のパネル討論では、環境省気候変動適応室の大井通博氏、国立環境研究所気候変動センター長の向井人史氏らが登壇し、日本全体の適応政策、各自治体の地域気候変動適応センターの実践例などについて、参加者からの質疑応答を交えながら活発な議論が行われました。参加者からは、「茨城県でもここまで気候変動の影響が進んでいるとは知らなかった。参考になった」といった意見が聞かれました。



## ◆ 農学部・フードイノベーション棟の竣工記念式を開催

6月29日、阿見キャンパスに新設された農学部のフードイノベーション棟の竣工記念式が開催され、約200人が出席しました。

本学農学部・大学院農学研究科では、全国屈指の農業産出額を誇る茨城県において、食・農の未来を担う人材育成を強化し、あわせてグローバル化に対応するため、2017年度に改組を行い、定員を大きく増員しました。それに伴い、教育・研究環境を整備するための新棟建設予算が文部科学省より措置され、さらに創立70周年にあわせた卒業生等からの寄附も集まり、新たな「フードイノベーション棟」の建設に至りました。同棟は3階建てで、大講義室のほか、食品加工の国際的な安全衛生基準であるHACCP（ハサップ）に対応した実験施設、共同研究機関が利用できるインキュベーション施設などを備えています。

竣工記念式で三村信男学長は、「私たちの食の、作るところから出口までの安全・安心を確保する教育体制により、専門人材を育成していきたい」と意気込みを述べました。

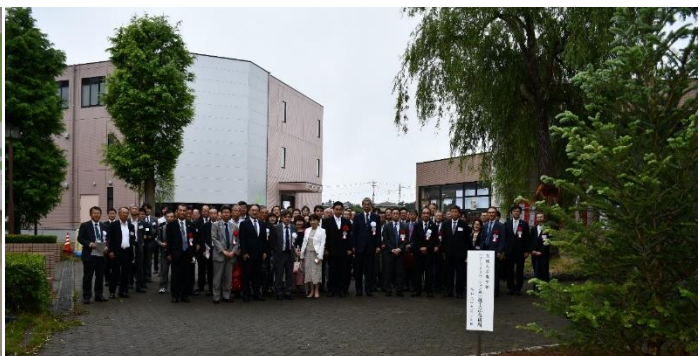
式典には、来賓として文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部の平井明成部長、農林水産省食品産業局食品製造課食品企業行動室の都築伸幸室長、茨城県農林水産部の白石貴男次長が出席し、それぞれ祝辞を述べました。このうち平井氏は、「施設整備の必要性に対する大学関係者の強い熱意が実を結んだ。企業、自治体、農業従事者といった産官学の連携、グローバル規模の農業の持続可能性に貢献する人材育成の場として活用されることを期待する」と語りました。

その後は、東京農業大学の五十君静信教授が、「食品衛生法改正における国際整合性の重要性とHACCP制度化の動向」と題した基調講演を行い、市民の理解を得ながらHACCPへの積極的な取り組みを進め、食のリスクマネジメントを強化することの必要性を訴えました。

ホールでの式典終了後は、施設の内覧を経て、新棟竣工を記念するモミの木の植樹に臨みました。最後は祝賀会が盛大に開かれ、これからの農業を担う新しい教育・研究の門出を全員で祝しました。



祝辞を述べる文部科学省大臣官房文教施設企画・  
防災部の平井明成部長



来場者による記念撮影  
左手の奥に見えるのがフードイノベーション棟

## ◆ 県教育長招き「教師の魅力」語るイベント

7月24日、教員志望の学生たちを対象とする「茨城大学全学教職センターシンポジウム 学生と語る教師の魅力」を開催しました。茨城県教育委員会の柴原宏一教育長による講演と直接対話により教職への理解を深めることがねらいです。

柴原氏は高校で生物の教員を務めたあと、茨城県立日立北高の校長や県教育次長などを歴任し、定年後は本学でも教鞭をとりました。2017年に県教育長に任命され現在に至ります。

柴原氏は、「今日は『教育長』という肩書きではなく、かつて教員をしていた個人として率直な話をしたい」と切り出し、自身が教師になった経緯や失敗談、印象深い生徒たちの思い出などを語り、学生たちも熱心に耳を傾けていました。

「生徒たちは可能性のかたまり。その可能性を引っ張っていくことが教師の仕事」と語る柴原氏は、「授業だけではなく、生徒との関わりすべてが大切。必死に生きている子どもたちに、教師は本音でぶつかっているだろうか」とフロアに問いかけた上で、教師という仕事の魅力として、「毎日子どもの言動に感動できること」と「生徒によって自分が成長できること」を挙げました。

後半の直接対話のパートでは、学生たちから「自分の性格上、教師になって必要以上に頑張りすぎてしまうことが心配」、「学生の中にやっておくべきことは何か」といった疑問や不安が率直に示され、柴原氏はデータなども示しながら真摯に答えていました。このうち「2ヶ月程度の教育実習だけの経験でいきなり現場に立つのは不安」という学生に対しては、「私たちは『最初はできなくて当たり前』と考えて教員採用に臨んでいる。『即戦力』という言葉は好きではない。複数担任制も広がりつつあるなど時代も変わってきているので、自分ひとりで責任を抱え込もうとせず、不安も『本音』として発信し、相談できる教師になってほしい」とエールを贈りました。



講演する茨城県教育委員会の柴原教育長



会場いっぱいの学生と直接対話に臨む



## ◆ SDGs 達成に向けた地域・大学のアクションを考える講演会 【茨城大・常磐大・茨城キリスト教大】

茨城大学・常磐大学・茨城キリスト教大学は、7月25日、本学水戸キャンパス図書館において、「SDGs 達成に向けた地域・大学のアクションを考える」と題した講演会を共催で開催しました。会場は SDGs に関心のある一般市民や大学関係者などであふれ返り、また、共催の各大学のキャンパスにも VCS で配信され、約 350 人以上が講演に耳を傾けました。

2030 年までに世界が達成すべき 17 の目標をまとめた国連の SDGs（持続可能な開発目標）については、大学も積極的な役割が期待されており、今回三大学では、その達成に向けて大学と地域が連携して取り組むべきことを考え、発信する場として連携講演会を企画しました。

まず冒頭で、前国連地域開発センター所長の高瀬千賀子氏が、SDGs の基本的な概念や策定の経緯について解説し、その後、各大学の学長がそれぞれの取り組みを報告しました。

本学の三村信男学長は、気候変動の影響に対応するための茨城県地域気候変動適応センターを大学内に開設したことなどを紹介するとともに、持続可能な社会に必要な人を育てるための教育改革の取り組みを報告しました。

国連に勤めた経験ももつ常磐大学の富田敬子学長は、同大における SDGs 関連の教育研究を「ときわアクション」として示し、「大学として、地域のステークホルダーとともに持続可能な茨城のグランドデザインを描き、提案していく責任があるのではないか」と協力を呼びかけました。

最後に登壇した茨城キリスト教大学の東海林宏司学長は、学生たちが授業等で取り組んでいる SDGs 関連の研究テーマを紹介し、事例として、農業県である茨城県における持続可能な農業の取り組みの推進の重要性を指摘しました。

後半は 3 人の学長が鼎談に臨み、「茨城という地域との関係」「必要な人材」「大学から提案していけること」といった視点で見解が語られました。その後の質疑応答では、学生たちから SDGs について学べる具体的なプログラムについて質問があり、各学長とも、具体的な機会を積極的につくり、示していくことを約束しました。

三大学では今後も連携して SDGs 達成に取り組んでいきます。



三大学の学長の鼎談の様子 高瀬氏がモデレーターを務めました。



司会を務めた「SDGs×イバラキ」という学生チームのメンバーも交えて写真撮影

## ◆ オープンキャンパス開催

本学のオープンキャンパスが、7月27日に水戸キャンパス・阿見キャンパスで、8月3日に日立キャンパスで、それぞれ行われました。

27日は荒天の影響も危ぶまれましたが、水戸7,858人、阿見959人、日立1,158人と、それぞれ昨年より多い来場者があり、盛況のうちに終了しました。



## ◆ 成績優秀学生を表彰 表彰者は授業料を一部免除

7月31日、水戸キャンパスにおいて令和元年度前学期成績優秀学生表彰式を行いました（日立キャンパス、阿見キャンパスはVCS接続により同時開催）。この制度は、学生の勉学意欲の向上に資することを目的として、学業成績が特に優れ、かつ、人物が優秀であると認められる学生を表彰するとともに、授業料を免除するというものです。

今回は、学部4年次生34名及び大学院修士課程1年次生31名、計65名に表彰状を授与しました。表彰された学生は、令和元年度前学期分授業料の4分の1が免除されます。

表彰式で三村学長は、「65名もの学生を表彰することができ、大変嬉しい。近年、日本の学生は勉強しないという批判をよく耳にする。しかし、本学の学生はアクティブラーニングや海外での実習など、色々な経験をして幅広い勉強をしてくれていると感じており、それらの努力がこの表彰につながっていると思う」と述べ、「勉学を通して将来どうなりたいか、ということを考えることは非常に重要。本日の表彰を契機にして、さらにいろいろな場所で活躍されることを期待する」と結びました。これに対し、表彰を受けた学生は「今までの努力の結果として表彰を受けることができ、とても嬉しい。指導いただいている先生方、また支えてくれる仲間感謝したい。今後色々な経験を積み、社会全体に貢献できるような人になりたい」と謝辞を述べました。

本学では、平成29年度までは学部学生を対象とした成績優秀学生奨学金制度を設けていましたが、これを平成30年度から授業料免除制度に切り替え、対象者を大学院修士課程（博士前期課程）の学生まで新たに拡充しました。

前期・後期を通して学部から大学院進学まで途切れることなく支援することで、学生の学修意欲向上につながることを期待されています。



表彰を受けた学生（水戸キャンパス）